

第二次世界大戦後における旧満州浜松開拓団の集団入植

——浜松市白昭を事例として——

三 室 辰 徳*

I. 問題の所在と研究方法

開拓地形成の担い手となった移住者に関する地理学的研究では、移民母村からの輩出¹⁾や入植および定着過程²⁾など、さまざまな事象が取りあげられてきた。従来の研究では、経済的困窮をはじめとする要因が潜在的移動者の意志決定としてとらえられてきた³⁾。石川友紀は経済的困窮以外にも共同体規制の崩壊や社会組織の特異性などを取りあげた⁴⁾。しかしながら、啓蒙家や先駆者の存在については、移住者の意志決定要因などの点で極めて重要な役割を果たしていた場合が多いにもかかわらず、その存在の指摘はあっても、これが主要な研究テーマとなることはほとんどなかった⁵⁾。移住者と移住斡旋業者との関係は、史・資料から考察することが可能である。しかし、移住の意志決定過程を規定する移住者個人と啓蒙家・先駆者との関係については、聞き取り調査に頼らざるをえないことが多かった。そのため、これに類する研究は未だ蓄積をみていないのである。

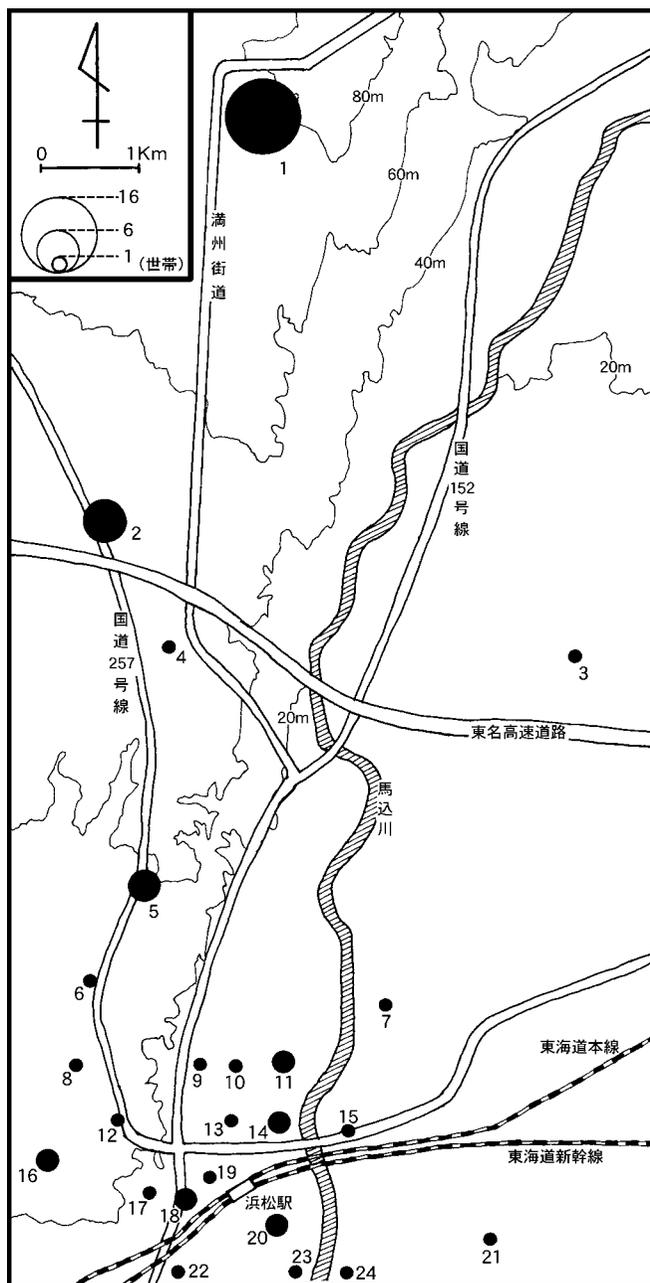
そこで本稿では、啓蒙家が移住に果たした役割を解明することを目的とする。その際、

彼らが開拓地にどのような影響を与えたのかについても注目する。

移住者の意志決定過程を解明するうえで、第二次世界大戦後における旧満州開拓団の集団入植は興味深い事例である。当初、経済的困窮から旧満州へ移住した人々は、当時の日本社会の情勢から、本人達の意志決定とは関係なく帰国することを余儀なくされた。そして、戦後に再び集団で開拓村落へ入植する者があらわれた。この背景には、経済的困窮以外の意志決定の要因が、旧満州開拓団団員に存在していたことを想起させる。すなわち、旧満州開拓団を研究対象にすると、経済的困窮以外の意志決定の過程について解明しうる事例と考えられる。そこで事例地域として、旧満州浜松開拓団に所属した一部の団員によって、戦後に集団入植が行われた浜松市白昭⁶⁾を取りあげる。

旧満州開拓にかかわった静岡県出身者については、『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』⁷⁾を活用した。前述したように、移住者個人の意志決定過程を解明するには、聞き取り調査に頼らざるをえないことが多い。そのため、白昭への入植の意志決定に関して、入植動機を中心とした聞き取り調査を行った⁸⁾。また比較対象として、旧満州開拓団の団員以外で戦後に農業を目的とした白

* 社会福祉法人聖隷福祉事業団



第1図 戦後における浜松開拓団団員の分布 (昭和30年当時)

(5万分の1地形図を基図に『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』より作成)

1. 白昭 2. 葵西 3. 大瀬 4. 小豆餅 5. 住吉 6. 城北 7. 上西 8. 鹿谷
 9. 元浜 10. 八幡 11. 野口 12. 松城 13. 常磐 14. 馬込 15. 相生 16. 鴨江
 17. 元魚 18. 平田 19. 千歳 20. 北寺島 21. 西伝寺 22. 浅田 23. 龍禅寺 24. 楊子

昭への入植者だけでなく、昭和30年代の入植者にも調査を実施した。さらに彼らの定着状況の差を把握するため、土地台帳からの考察も行なった。

事例とした白昭は、浜松市街地から市北部へと延びる通称満州街道⁹⁾沿いに位置している(第1図)。第二次世界大戦中までは、白昭を含む三方原台地北部地域一帯が爆撃演習場として使用されていた。その後、戦後緊急開拓実施要領¹⁰⁾の施行によりこの地域の開拓が進められた。そして、道路・用水路・排水路が計画的に建設され、一帯は大きく変貌をとげた。

II. 静岡県出身者による旧満州開拓団の地域的展開

1. 旧満州開拓団の編成

大戦中、静岡県下では単独・混成・義勇開拓団¹¹⁾などさまざまな形態による旧満州開拓団が編成された。そのなかにあつて、静岡県下四箇団¹²⁾は福田町・中川根町・静岡市・浜松市などの県中西部の市町村が中心となり、単独開拓団として編成された(第1表)。静岡県下四箇団のなかで最も早く開拓団が編成されたのは福田開拓団で、昭和16年2月11日、79名の人員をもって龍江省鎮東県龍山への移

住が開始された。その後、昭和17年のほぼ同時期に川根・駿府・浜松の各旧満州開拓団が、龍江省鎮東県の周家・到保・白昭にそれぞれ移住を始めた。

静岡県下四箇団のなかで福田開拓団は、先駆的・実験的意味合いが強かった¹³⁾。そのため、団員には福田町以外からの旧満州開拓に関心のある者なども含まれていた。川根開拓団では団員が農家の二男・三男を中心にして編成された。そのため、この開拓団では渡満以前から営農経験を有する者が大半であった。これに対し、駿府開拓団と浜松開拓団では大戦中の統制経済導入により職業を失った小売商・会社員・職人などが多数を占めたことにより、営農経験のない都市商業者を中心にして編成が行われた転業開拓団¹⁴⁾であった。

なお、浜松開拓団に関しては、昭和20年5月に団長が大井泰造から大野篁二に交代したということが、後述するように、戦後における白昭への入植者に大きな影響を与えた。

2. 第二次世界大戦後における旧満州開拓団の帰着状況

旧満州で終戦を迎えた静岡県下四箇団は、福田開拓団以外ほぼ同時期に引き揚げを開始した¹⁵⁾。その後、静岡県下四箇団は新京(長春)で約1年間の難民生活を経験し、日本へ

第1表 静岡県下四箇団一覧

開拓団名	主な出身地	団長	移住地(旧満州)	移住年月日	人数(終戦前)	主な移住者
福田	福田町	矢崎秀一	龍山	昭和16年2月11日	347	——
川根	中川根町	板屋牡吉	周家	昭和17年4月	617	農家の二男・三男
駿府	静岡市	片岡清志	到保	昭和17年4月	719	都市商業者
浜松	浜松市	大井泰造 大野篁二	白昭	昭和17年3月10日	487	都市商業者

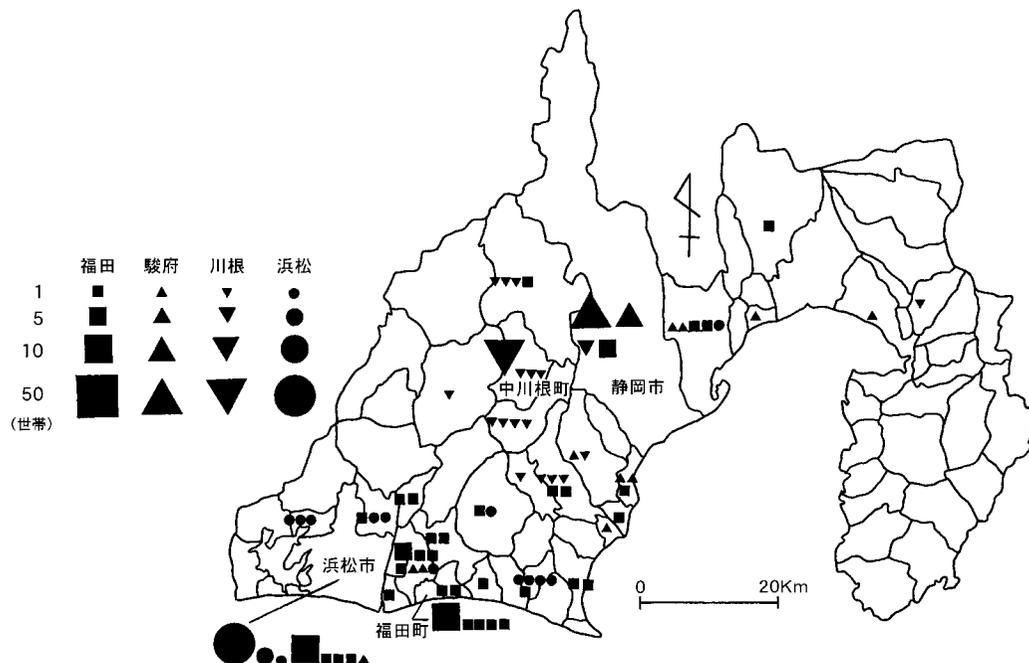
(『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』より作成)

帰国したのは、昭和 21 年の 8 月下旬から 9 月上旬にかけてであった。

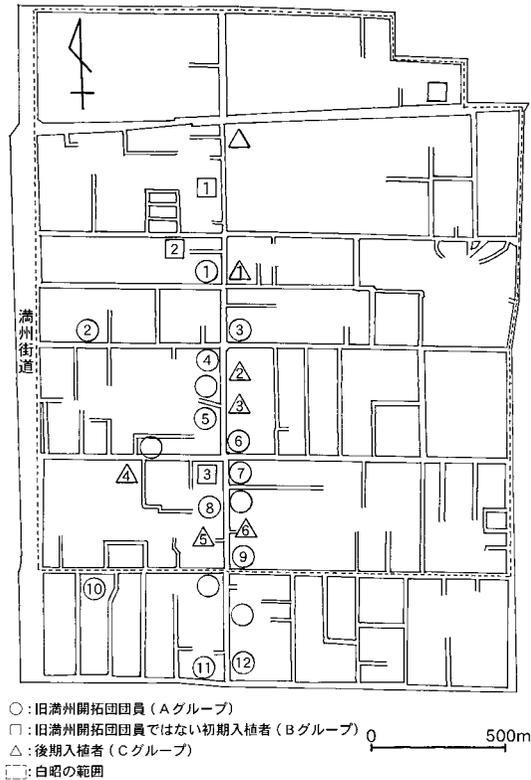
静岡県下四箇団の団員は、大多数が静岡県に帰着した。戦後、彼らは原則として渡満以前の居住地に帰着したと考えられる(第2図)。すなわち、静岡県下四箇団を編成する際に中心となった市町村に団員が集中しており、その傾向は中川根町・静岡市・浜松市において顕著である。一方、福田開拓団の場合では、県西部の広範囲に分布がみられる。これは、前述した通り福田開拓団が早期に編成され、先駆的・実験的意味合いが強かったため、福田町以外にも広範囲に互って満州開拓に関心のある者が参加したということが理由として考えられる。また、県東部・伊豆地方での団員の分布が少ないことも指摘できる。このことから、静岡県下四箇団が県中西部の市町村を中心にして

編成されたため、団員には県東部・伊豆地方出身者が含まれていなかったといえる。

浜松開拓団では、戦後に浜松市域に帰着する団員が多数を占めた¹⁶⁾。それらをみると、市街地である中央部と郊外である北部の白昭に団員が集中している(第1図)。前者については、浜松開拓団が都市商業者を中心とした開拓団であったため、団員が元の居住地であった市街地に帰着したと考えられる。しかしながら、白昭は大戦中までは軍用地として使用されており、団員の旧居住地ではなかった。これについては、原田由起乃¹⁷⁾が論じたように経済的およびその他の理由で市街地で生活することのできなかつた団員が、旧満州開拓での経験を活かして未開地であった白昭へ集団で入植したものと考えられる。



第2図 戦後における静岡県下四箇団団員の分布(昭和30年当時)
 (『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』より作成)



第3図 白昭における入植者居住地
 ※グループおよび世帯番号は第2表と対応する
 (聞き取りにより作成)

Ⅲ. 白昭における入植者の展開

1. 白昭への入植の要因

白昭には、確認できるだけでも16世帯の浜松開拓団員が入植した。戦後、浜松市に帰着した浜松開拓団員が52世帯であるから、そのうちの約3分の1が白昭へ入植したことになる。

入植者は旧満州開拓団員(以下Aグループ)¹⁸⁾、旧満州開拓団員ではない初期入植者(以下Bグループ)、後期入植者(以下Cグループ)に大別できる(第3図・第2表)。なかでもA・Bグループは戦後まもなく白昭に

入植し、集落形成の中心的役割を担った。一方、CグループはA・Bグループのなかで農業継続の意志がなかった者との交替、またはA・Bグループの農地を買収して、昭和30年頃から入植を始めた者から構成される。

入植者の前住地をみると、Aグループはほぼ全員が浜松市出身であるのに対し、Cグループのそれは多方面にわたっている。この理由は、Aグループの大半が浜松市街地の都市商業者によって編成された浜松開拓団の団員であり、Cグループの各自が前住地でさまざまな経緯により白昭の存在を知ったためと思われる¹⁹⁾。なお、Bグループにおいて前住

第 2 表 白昭における入植者一覧

グループおよび世帯番号	年齢	入植年	前住地	前職	現職	入植時の家族人数	現家族人数	大野篁二との関係
A-1	61	昭和 24	浜松市	料理店	農業	7	3	○
A-2	70	昭和 22	浜松市	会社員	農業	7	4	○
A-3	74	昭和 23	浜松市	会社員	農業	3	8	○
A-4	82	昭和 22	浜松市	乾物屋	農業	4	5	○
A-5	72	昭和 22	浜松市	人形屋	農業	3	8	○
A-6	66	昭和 24	浜松市	履物屋	農業	6	3	○
A-7	64	昭和 23	川根町	無職	農業	8	4	○
A-8	79	昭和 22	浜松市	郵便局員	農業	6	7	○
A-9	65	昭和 22	浜松市	製麺業	農業	5	2	○
A-10	71	昭和 23	浜松市	八百屋	農業	11	3	○
A-11	65	昭和 22	浜松市	製造業	農業	6	2	○
A-12	64	昭和 22	浜松市	新聞記者	農業	5	5	○
B-1	不詳	昭和 25	浜松市	鉄工業	無職	2	5	○
B-2	65	昭和 25	東京都	新聞記者	農業	4	6	○
B-3	70	昭和 25	浜松市	木工職人	農業	1	2	○
C-1	64	昭和 29	細江町	農業	無職	1	7	×
C-2	59	昭和 33	浜松市庄内	農業	農業	1	5	×
C-3	72	昭和 32	浜松市庄内	農業	農業	2	6	×
C-4	76	昭和 31	長野県	農業	農業	6	3	×
C-5	69	昭和 32	細江町	農業	農業	1	7	×
C-6	65	昭和 29	山形県	学生	農業	1	7	×

(聞き取りにより作成)

※グループおよび世帯番号は第 3 図と対応する。

※年齢・現職業・現家族人数は平成 11 年現在のものである。

地がさまざまになったのは、入植動機およびそれに関係する家族構成に影響を受けたものと思われる。

入植者の前職をみると、A・B グループでは全員が農業以外であるのに対して、C グループでは農業となっている²⁰⁾。A グループに関するこの結果は、浜松開拓団が都市商業者からなる転業開拓団であったことに起因している。そして C グループの場合では、大半が前住地で土地を分け与えられなかった農家の二男・三男からなる入植者で構成されていたか

らである。B グループの前職が農業以外の多岐に渡るのは、前住地と同様に後述する入植動機、およびそれに関係する家族構成に影響を受けたためと思われる。

前職では各グループ間での違いが顕在化した²¹⁾が、入植後には全員が農業に携わっている²¹⁾。しかしながら、農業経営は各戸で独自に行われ、入植直後から農業経営に関して共同作業が行われることはなかった。すなわち、白昭では旧満州での経験を活かした集団作業は行われなかったのである。これは、旧満州

での集団作業が期待通りの成果を上げられなかったからであろう。

Cグループでは、前住地で土地を分け与えられなかった農家の二男・三男が大半を占める。そのため、「当地が農業適地であった」、「土地が売り出されていた」などのように入植動機も土地に関することが挙げられる。一方A・Bグループでは、「他の旧満州開拓団団員が入植した」、「旧満州開拓団ともう一度開拓を成し遂げようとした」などのように人的要因が入植動機となっている（第3表）。ここで特に注目すべき点は、大野篁二という人物の存在である。とりわけAグループのほとんどが白昭に入植する契機をうながしたのは、浜松開拓団団長であった大野篁二の存在である。また、Bグループの全員の入植動機が大野篁二の紹介となっている。

2. 大野篁二と入植者との関係

昭和20年5月当時、浜松市市会議員を務めていた大野篁二は市当局に委任され浜松開拓団の団長となった（第4表）。それ以前まで、浜松開拓団では大井泰造という人物が団長を務めていた。しかし、旧満州で開拓の成果が上がらないことに危機感を持った市当局は、大野篁二の人柄と農業活動での実績を評価し、彼に浜松開拓団を託した

のである²²⁾。そのため、浜松開拓団では一時に団長が二人存在するという混乱を招いた。しかし、まもなく終戦による引き揚げを迎え、この問題も立ち消えた。その後、浜松開拓団は新京（長春）で一年間の難民生活をおくった。ここでの生活において指導力を発揮することにより、大野篁二は団員の信頼を獲得することになったと思われる。さらにこの難民生活中に大野篁二は、浜松開拓団団員が帰国後に入植できる土地を確保できるように、市当局など関係各方面に働きかけていた²³⁾。

帰着後、浜松開拓団の一部団員は大野篁二の尽力により、浜松市小豆餅の農業試験場に居住し、白昭の開拓に着手した。昭和22年頃からは居住地も白昭に移し、入植は本格的に行われるようになった。

大野篁二と関係をもっていた入植者について考察すると、Aグループは直接的に大野篁二と関係をもち、Bグループは間接的に関係をもっていた（第5表）。さらにAグループでは、浜松開拓団における団長と団員という間柄が多数を占め、全員が大野篁二と直接的に関係をもっていた²⁴⁾。大野篁二との関係は、入植時の家族構成にも影響をあたえている（第4図）。Aグループでは、大野篁二と直接的に関係をもっていた人物が彼を頼って家

第3表 グループ別にみた入植者の入植動機

入植動機	A	B	C	計（人数）
他の旧満州開拓団団員が入植した	7	0	0	7
旧満州開拓団団員ともう一度開拓を成し遂げようとした	4	0	0	4
当地が農業適地であった	1	0	3	4
大野篁二の紹介	0	3	0	3
土地が売り出されていた	0	0	2	2
前住地で災害にあった	0	0	1	1

（聞き取りにより作成）

第4表 大野篁二をめぐる個人年表

年 月 日	事 項
明治 23 年 8 月 20 日	福井県今立郡鯖江町にて、大野末蔵の次男として生まれる
30 年 4 月	鯖江惜陰小学校入学
36 年 3 月	鯖江惜陰小学校高等科卒業
36 年 4 月	大阪に出て、五十嵐貿易商社に丁稚奉公の傍ら大阪語学学校に入学
39 年 3 月	大阪語学学校卒業
43 年 12 月	金沢野砲兵第9連隊に入隊し、大正2年11月除隊
大正 3 年 1 月	大阪市農人橋一丁目に貿易商社富士商会を設立する
9 年 2 月	貿易事業を兄弟に譲り、求道生活に入り宗教行脚の途につく
10 年 9 月	浜松に来住して、高町日本キリスト教会の設立に尽力する
13 年 1 月	東京に出て内村鑑三・植村正久に師事する
15 年 1 月	浜松市和地山に聖隷社農場を開き農耕に従事する（原本参照のこと）
昭和 5 年 4 月	聖隷社農場塾を設立し、農村伝道および海外発展思想の普及に尽力する
12 年 4 月	衆議院議員選挙に社会大衆党より立候補し落選する この時期から社会主義政治活動を積極的に行う
13 年 9 月	浜松市会議員に最高点当選
17 年 4 月	満州国中華民国の開拓事業を視察
17 年 9 月	浜松市会議員に再選
20 年 5 月	満州国龍江省鎮東県白昭浜松村開拓団長を委託され渡満する
20 年 8 月	終戦と同時に開拓団員一般避難民を引率して新京に引き揚げ、引揚訓練指導にあたる
21 年 9 月	引揚者を引率し内地帰還 引揚者の開拓地入植に尽力する
21 年 12 月	浜松市農地委員会長に就任し、農地解放に努力する
22 年 4 月	浜松市長選立候補し落選する
23 年 4 月	浜松市高台農業共同組合長に就任
24 年 5 月	静岡県厚生農業協同組合連合会理事および副会長に就任
26 年 6 月 18 日	静岡市厚生病院にて永眠

※太字部分は大野篁二と旧満州浜松開拓団との関係を示す。

(大野篁二追悼録『零』より作成)

第5表 グループ別に見た入植者と大野篁二との関係

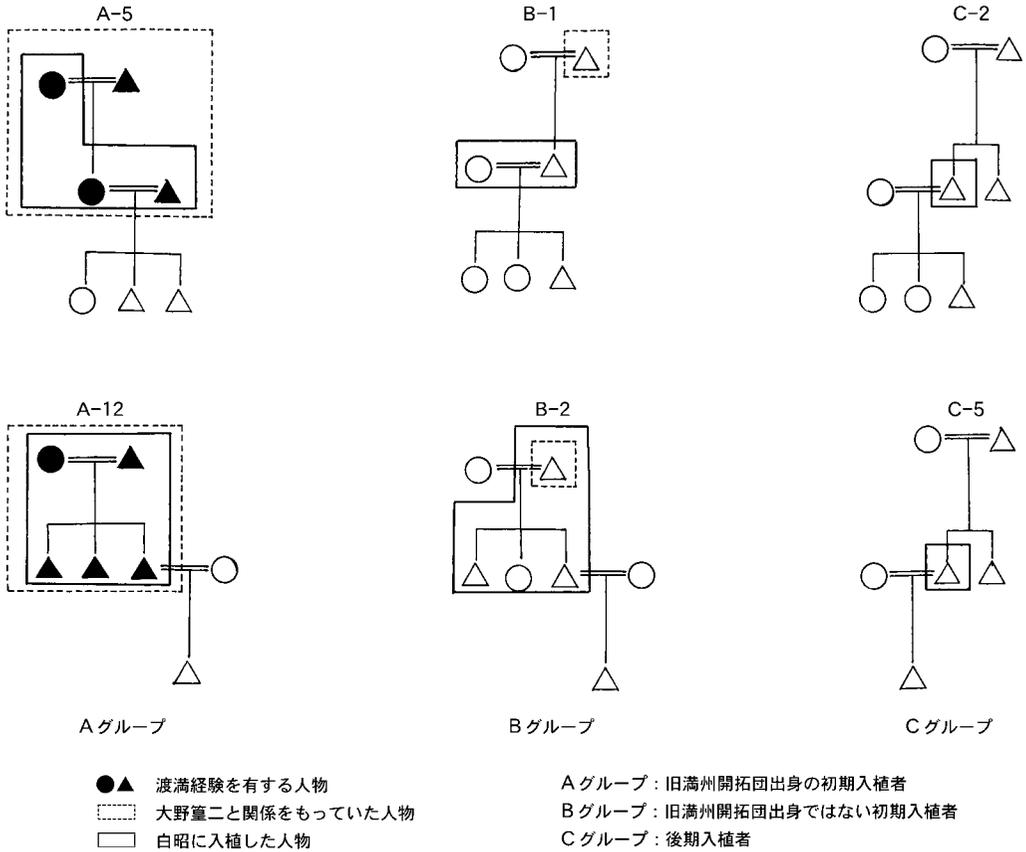
大野篁二との具体的関係	A	B	計 (人数)
旧満州開拓団における団長と団員という関係	10	0	10
旧満州から引き揚げの時に知り合いとなった	2	0	2
父親が大野篁二と知り合いであった	0	2	2
キリスト教信者であったため、大野篁二を知っていた	0	1	1

(聞き取りにより作成)

族単位で入植しており、入植した家族全員が渡満を経験している。

一方、Bグループでは世帯主が大野篁二と旧知の間であったことをはじめ、第三者を介

して大野篁二と関係をもっており、家族単位や単身などさまざまな形で入植している。Bグループの世帯主達は、大野篁二が各地域で行ったキリスト教活動や社会主義運動（第4



第4図 各入植者グループの家族構成の事例

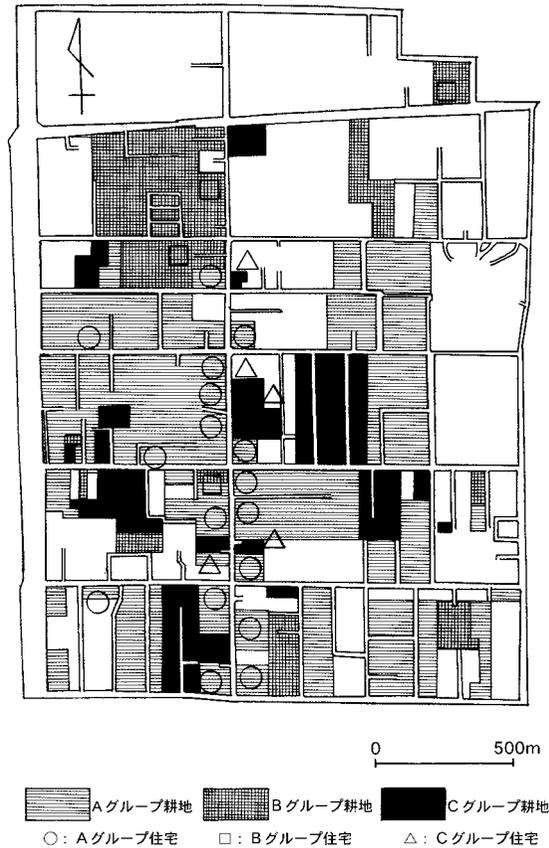
※一部省略
 (聞き取りにより作成)

表)に参加・協力していた。これらの活動に参加・協力するまでの経緯には、Bグループの世帯主達が居住していた地域や携わっていた職業が影響を及ぼしている²⁵⁾。Bグループの前住地や前職業が多様化しているのは、このことに起因しているものと思われる。なおCグループでは、大野篁二の死後に入植してきたため、大野篁二と関係をもっていた人物は存在しない。

3. 耕地に関する先着入植者の優位性

A・Bグループは昭和20年代に入植すると、白昭開拓組合²⁶⁾を設立した。この組合は、

抽選によって白昭の耕地を各入植者にほぼ同じ面積に分割すること、中央の道路に沿って住宅を集中させることなどを決定した²⁷⁾。これによりA・Bグループには、各戸に1町8反の耕地が平等に割り当てられた。しかし、昭和20年代から入植していたA・Bグループと、昭和30年代になって入植してきたCグループとの間には耕地に関して優劣が生じた。それは耕地の面積やその場所ならびに等級に関わるものではなく、耕地と住宅の近接性において顕在化した²⁸⁾。



第5図 昭和40年における各入植者グループの耕地の状況

(土地台帳より作成)

昭和40年における各グループの土地の所有状況をみると²⁹⁾、A・Bグループの耕地と住宅は概ね近接している(第5図)。これに対して、CグループはA・Bグループの隙間を埋めるように土地を所有しており、耕地と住宅は必ずしも一致していない。これは、A・Bグループ内での抽選が、中央の道路に沿って居住地を集中させることを第一義的に考えていたからである。このため、電気・水道の関係上、後着入植者であるCグループの住宅は中央道路に沿って設けなければならなかった。その一方でA・Bグループから購入した

Cグループの耕地は、住宅からの移動距離が大きく効率が悪いものとなった。

耕地と住宅の近接性という視点については、白昭では先着入植者の優位性が存在していた。先着入植者と後着入植者間の耕地に関する優劣は、入植動機すなわち大野篁二との関係に由来している。先着入植者は、大野篁二と関係をもっていたことにより早期に入植し、優位な耕地を所有することができた。しかし、後着入植者は白昭における大野篁二の影響が弱まった昭和30年代以降に入植したため、耕地に関して先着入植者の影響を強く受

けた。よって、大野篁二の存在が白昭での耕地の所有状況にまで影響を与えていたといえよう。

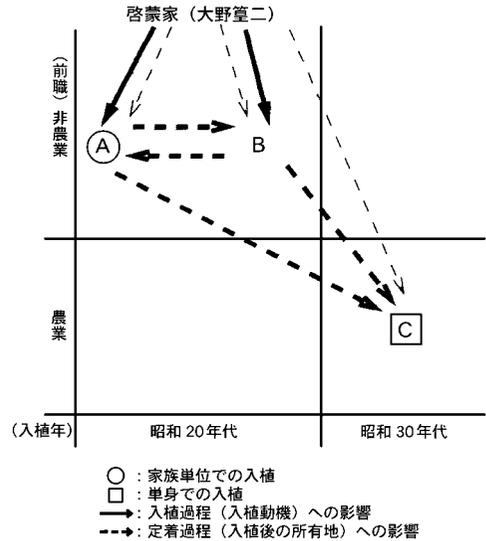
IV. おわりに

第二次世界大戦後、静岡県下四箇団では渡満以前の居住地に帰着する者が大多数を占めた。これはミクロなスケールからみても同様であり、都市商業者からなる浜松開拓団団員は元の居住地である浜松市街地に帰着した。しかしながら、彼らのなかにはかつての居住地ではない市域地北部に位置する白昭へ入植する者も多数存在した。

白昭では、戦後緊急開拓実施要領の施行により開拓が進められた。ここへ入植者として、旧満州開拓団団員（Aグループ）以外にも、団員ではない初期入植者（Bグループ）や後期入植者（Cグループ）が存在した。各グループ間では、入植後の耕地の所有状況に関して優劣が生じた。これは、前住地・前職・家族構成などの諸要因からなる各グループにおける入植動機の違いによるものである。

入植動機に関して、白昭では大野篁二という啓蒙家の存在が大きな影響を与えていた。彼はA・Bグループが白昭へ入植する契機を作り出すとともに、入植者の家族構成ならびに白昭での耕地の所有状況にまで影響を与えた。

以上の結果から、白昭における入植地の形成過程を概念的にあらわしたのが第6図である。入植過程については、啓蒙家がA・Bグループの入植動機形成に関与していたと言える。定着過程への影響をみると、啓蒙家は全グループに対して影響を与えていた。こ



第6図 啓蒙家を与えた入植地形成過程への影響
※矢印の太さは関係の強さを表す

の点は、各入植者と啓蒙家との関係により、耕地の所有状況に関して優劣が生じたことから明らかである。また、A・Bグループが組合を設立して、そのなかで耕地分割を行ったことから、A・Bグループは定着過程において互いに影響を与えあっていたといえよう。なお、Cグループの定着過程においては、先着住民であるA・Bグループが耕地の所有状況などで一方的に影響を与えていた。

啓蒙家を対象とした従来の地理学的研究では、移住者と移住幹旋業者との関係を史・資料から考察することに終始していた。そのため、潜在的移動者個人の意志決定要因を必ずしも解明してこなかった。そこで、本稿では啓蒙家の存在は入植動機すなわち意志決定の要因として成立するというを明らかにした。また、これまでは意志決定の要因（本稿では啓蒙家の存在）がその後の移住者に与える影響についてまでほとんど論じられていな

かった。本稿では、啓蒙家の存在が入植地での耕地の所有状況にまで影響を与えていたということも説明した。

移住という行為は、潜在的移動者の意志決定の結果である。また移住者は、輩出・入植・定着という過程を経る。よって、意志決定の要因が輩出・入植・定着という各過程を通して、移住者および空間にどのような影響を与えていたのか解明することは、重要な視点なのである。

〔付記〕本稿は1999年12月に、立命館大学文学部に提出した卒業論文に加筆・修正したものです。本稿作成にあたり、立命館大学の河原典史先生には多くの御教示を賜りました。また、現地調査においては、長谷川要一氏、熊切敏夫氏をはじめとする多くの方々にお世話になりました。ここに記して、深く感謝申し上げます

注

- 1) 石川友紀①「広島湾岸地御前村契約移民の社会地理学的考察」、人文地理 19-11、1967、75～91頁。②「海外移民と国内移住—沖繩勝連村浜比嘉島比嘉の場合—」、地理学評論 41-9、1968、585～593頁。③「沖繩出移民の歴史とその要因の考察」、史学研究 103、1968、40～54頁。④「沖繩自由移民の社会地理学的考察—旧首里市の場合を例として—」、人文地理 22-1、1970、82～101頁。⑤「日本出移民史における移民会社と契約移民について」、琉球大学法文学部紀要 14、1970、19～45頁。⑥「山口県大島郡東和町における出移民の歴史地理学的研究」、琉球大学法文学部紀要 34、1991、1～21頁。⑦『日本移民の地理学的研究』、榕樹書林、1997、223～464頁。
平井松午「徳島県出身北海道移民の研究—とくに初期移民の輩出過程および後期移民との結びつきについて—」、人文地理 38-5、1986、1～21頁など。
- 2) 飯田耕二郎「ハワイにおける日本人の居住地・出身地分布—1885年と1929年—」、人文地理 46-1、1994、85～102頁。
石川友紀①「南米における沖繩県出身移民に関する地理学的研究—第1次～第3次調査の回顧—」、琉球大学法文学部紀要 34、1991、45～54頁。②前掲1) ⑦、465～593頁。

菊地俊夫「那須山麓戦後開拓地における酪農発展と空間パターンの形成」、地理学評論 55-6、1982、359～379頁。

平井松午①「北海道移民にみる連鎖移住の構造」、地理学評論 61、1988、727～746頁。②「第二次世界大戦前における北海道移民の空間移動と定着状況」、地理学評論 64、1991、447～471頁。

平岡昭利「大東諸島の開拓とプランテーション経営—その歴史的展開を中心にして—」、人文地理 29-3、1977、1～26頁。

宮崎良美「石川県南加賀地方出身者の業種特化と同郷団体の変容—大阪府の公衆浴場業者を事例として—」、人文地理 50-4、1998、80～96頁。

矢ヶ崎典隆「カリフォルニア州ターラック地域における日本人移民の植民活動と移民社会」、地理学評論 69A-8、1996、670～692頁など。

3) 堤研二「人口移動研究の課題と視点」、人文地理 41-6、1989、41～62頁。

平井松午「北海道移民研究の課題」、地方史研究 245、1993、2～6頁など。

本稿では、経済的困窮をはじめとする諸要因により、移動の意志を有するようになった者を潜在的移動者として考える。

4) 石川：前掲1) ③、40～54頁。

5) 桑原真人「明治・大正期の北海道移住」、『新しい道史』35、1968、1～15頁。

島岡宏①「明治18年の日本人出移民再開の一考察—ハワイ官約移民制度成立にみる人的背景について—(I)」、大阪学院大学国際学論集 3-2、1992、93～115頁。②「明治18年の日本人出移民再開の一考察—ハワイ官約移民制度成立にみる人的背景について—(II)」、大阪学院大学国際学論集 4-1、1993、117～138頁。平井：前掲1)、1～21頁など。

6) 「白昭」という名称は、第二次世界大戦中に浜松開拓団が移住した旧満州の龍江省鎮東県白昭に由来している。

7) 静岡県民生部援護課編『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』、1955、25～30頁。

8) 具体的には、年齢・入植年・前住地・前職業・現職業・入植時の家族構成・現在の家族構成・入植動機を聞き取り項目とした。

9) 白昭に多数の旧満州開拓団団員が入植したため、満州街道という名称になったという。

10) 食糧増産および戦災者や引揚者の帰農促進を目的としたものであり、昭和20年11月9日に閣議決定された。戦後開拓史編纂委員会編『戦後開拓史』、1967、32～34頁。

11) 単独開拓団とは、開拓団の成員が全て同県出身者により編成されている開拓団のことである。混成開拓団とは、開拓団の成員を全国から

- 募集して編成した開拓団のことである。なお義勇開拓団とは、小卒男子および農家の二男・三男からの応募者達に三年間、農事訓練を施したものを義勇隊とよぶ。そして、その義勇隊が開拓団に移行したものが義勇開拓団である。
- 12) 静岡県下四箇団とは、旧満州福田開拓団・旧満州川根開拓団・旧満州駿府開拓団・旧満州浜松開拓団のことである。なお正式名称はそれぞれ、第十次竜山福田開拓団・周家川根開拓団・第十二次駿府郷開拓団・第十二次浜松郷開拓団である。
 - 13) 省立女塾（竜山福田女塾）を建設したことが、福田開拓団の先駆的・実験的な特色として挙げられる。女塾とは、一般女性の社会進出を目的として、花嫁の養成ならびに女子指導員を養成するために開設された満州開拓の助成施設である。
 - 14) 開拓団の成員が、農業以外の各職種を廃業した者達によって編成されている開拓団のことである。
 - 15) 福田開拓団は、混乱のなか他の旧満州開拓団との連絡が途絶えたため、約1週間ほど引き揚げが遅れた。そのため、福田開拓団の被害は甚大なものであった。
 - 16) 浜松開拓団では、70世帯の第二次世界大戦後の居住地が確認できた。そのうち、52世帯の居住地が浜松市内であった。静岡県民生部援護課編『静岡県送出満州開拓民人員等一覧表』、1955、25～30頁。
 - 17) 原田由起乃「戦後開拓地における集団の組織化と変容」、人文地理 50-2、1998、188～203頁。
 - 18) Aグループのなかには、浜松開拓団以外に福田開拓団の団員（A-4、A-9）も含まれている。前述のとおり、福田開拓団は静岡県下四箇団のなかで先駆的・実験的開拓団であったため、浜松市出身者も参加していた。A-4、A-9も浜松市出身ながら、福田開拓団の団員であった。
 - 19) 例を挙げると、C-4は第二次世界大戦前に父親が軍の仕事で浜松市都田町に赴任していたため、当地を知っていた。その後、前住地での災害が契機となり、白昭への入植を決意した。C-6は知人が白昭付近の集落に居住していたため、当地における土地の売却を知り、入植に至った。
 - 20) 前職業については、白昭に入植する直前のものを聞き取り調査の対象としている。しかしながら、Aグループは白昭に入植する前には、旧満州開拓団の団員であったため、渡満以前の職業を対象としている。
 - 21) 現職業が無職となっているC-1も、平成元年までは農業を行っていた。
 - 22) 大野篁二はキリスト教信者であり、浜松市を中心に農村伝道を行うとともに、積極的に農業活動を展開していた。
 - 23) 小城榮太郎編『大野篁二追悼録「雫」』、開明堂、1958、1～186頁。
 - 24) Aグループのなかでも福田開拓団団員のA-4とA-9は、新京（長春）での難民生活で大野篁二を知った。その後、浜松市出身ということもありA-4とA-9は浜松開拓団と行動を共にし、帰国時には大野篁二の指導下にいた。このような関係により、両者は戦後に白昭へ入植した。なお、両者と大野篁二との具体的関係は、旧満州からの引き揚げの時に知り合ったことによる。
 - 25) 例を挙げると、B-3の世帯主は浜松市に居住してキリスト教活動を行っていたため、大野篁二の存在を知り、協力するに至った。B-1の世帯主は当地で影響力をもつ鉄工会社を運営していたため、大野篁二の存在を知るに至った。
 - 26) 白昭開拓組合の名称は、大野篁二の命名による。
 - 27) 住宅を集落の中央に集中させたのは、集落内での電気・水道の供給を容易にするためであった。そのため、浜松市白昭では昭和25年という比較的早い時期に電力が確保されていた。しかしながら、水道に関しては水源の確保が困難であったため、昭和30年代に入ってから集落に水道が備え付けられた。
 - 28) 坂本英夫「耕地の地理的分布にみられる先着家系の優位性—北海道北見盆地での一事例—」、人文地理 32-2、1980、61～69頁。このなかで坂本は「農民にとって耕地条件の優劣の尺度は二通りある。一つは自然条件の良否、もう一つは住居からの距離である」と論じている。白昭では現存する土地台帳には等級の記載がないため、本稿では坂本の論じた耕地における住居からの距離という視点から土地の優劣を考察する。
 - 29) 白昭への入植は、最終的に昭和30年代中頃まで続いた。また昭和50年代以降になると、白昭への農業目的以外の転入者が増加した。よって各グループ間における耕地の優劣を論じるには、昭和40年における土地所有状況を把握することが最も適切であると思われる。